

イエシュックの「体系書」

國學院大學教授 甘利 航司

今から、20年以上も前である。大学院に進学して、ドイツ語の文献を読む必要があるということで、さて、お薦めのドイツ刑法の教科書は何でしょうか、という話になった。橋本先生の授業だったかもしれないし、本庄さんとの雑談で出てきたのかもしれない。挙げられたのは、ヴェッセルス (Wessels) の教科書とイエシュックの体系書だった。図書館に行って探してみたのだが、前者は古い版しかなかったが、後者は最新の版があった。そして見て驚くのだが、ともかく大きい。図鑑か、というのが見た際に感じた感想だった。章ごとに、当然、それぞれのテーマを論じていくのだが、まず、膨大な参考文献が記載され、そこから、内容に入っていく。とても驚いたことを本庄さんに伝えたと、これが「体系書」というものなんだと言われた。なるほどと思った。

しばらく、コピーしたもので勉強していたのであるが、前の方の箇所の参照指示や、後の方の箇所の参照指示もある。そこで、購入したほうがよいと思うようになった。どうやったら購入できるのか、何よりいくらになるか。私は、近所の馴染みの本屋さんに行き、店長に購入は出来るのでしょうかと伺い、できるという答えだった。どのぐらいかかったのか正確には覚えてはいないが、2か月くらいして入荷した。またしても驚くことになる。あまり高くはならないとは聞いていたが、6000円前後だったと思う。この分量で、その値段なのか(しかも、本を入れる箱まで付いている)。そして、クリーム色の表紙が付いていて、茶色の文字でHans-Heinrich Jescheck/ Thomas Weigend, Lehrbuch des Strafrechts Allgemeiner Teil, Fünfte Auflageと書かれている。前から気付いていたが、本体の紙質が良く、光の反射が抑えられ、文字が小さいにもかかわらず非常に見やすい。そして、購入後、表紙付きを見て、表紙も本体と同様の紙質で、かなり良い紙を使っているのが分かった(誤解を恐れずに言えば、和紙のような感触である)。

言うまでもないので少し躊躇するが、内容も素晴らしい。歴史的な議論や比較法的な紹介を踏まえ、用語等を丁寧に説明しながら、学説を紹介し、自説(通説とされるものに近い)を展開する。イエシュック以外にも非常に多くの人たちが関わっており、何より、版を重ねてきて、この第5版から共著になっている。しかし、よくもこれほどの内容の本が出版できるのだと。当時もそう思ったが、今は、その思いがより強くなっている。

イエシュックの体系書は、これも多くの方が知っていることであるが、西原先生が監訳をされた「日本語版」が成文堂から公刊されている。全部が翻訳されているわけではない抄訳なのだが、これまた大部である。そして、原書が1996年に公刊で翻訳書が1999年に公刊されているので、短期間で作業が終了したことが分かる。西原先生をはじめとする翻訳を担当された方々や、全く利益が出ないであろう出版を引き受けた出版社には一大学院生の時には思いを巡らせることは出来なかったが—今は、ページを開くたびに、頭が下がる思いである。

イエシュックの体系書を見て思うのは、書き手が投入する膨大なエネルギー、そして、それを人的・経済的に支える体制、そのうえで、丁寧に編集する出版社。更に、その書籍を注意深く翻訳する研究者と、その成果をなんとか日本の読者に届けようとする出版社。少し見えづらいが—洋書・和書ともに一小売店や流通を支える業者の方々。こういった多くの人たちの尽力によって、学問が生み出され、伝えられていくということである。そして、このような大きな動きを作り出しているのは、何より、イエシュックその人だということである。

ここまで書いてみて気になったので、インターネットを使用して確認したのだが、再び、驚くこととなった。イエシュックの体系書は、ドゥンカー社(Dunker & Humblot)に、まだ在庫があり、値段も60ユーロ(!)である。